



TITLE:

<批評・紹介>ヘエニツシユ氏の元朝秘史

AUTHOR(S):

石濱, 純太郎

CITATION:

石濱, 純太郎. <批評・紹介>ヘエニツシユ氏の元朝秘史. 東洋史研究
1938, 3(5): 453-454

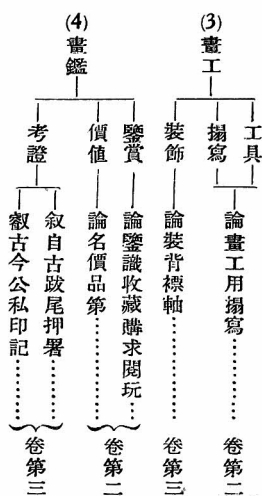
ISSUE DATE:

1938-06-28

URL:

<https://doi.org/10.14989/145620>

RIGHT:



小野勝年君の譯註本は、諸書によつて校合したこと、出来るだけ支那學關係外の人にも親しましめんとし、註を多くしたこと、かくてこの古典の論畫史上、繪畫史上の、間口奥行ともに廣き内容に光あらしめんと意圖したこと等は、その勞作のため高く評價せねばなるまい。新しい學問である支那美術史の部門では、この種の基本的な仕事は吾々の世代の課題であり、出發點たるべきを信するのである。(長廣敏雄)

ヘニツシュ氏の元朝祕史

Manghol un Niuca Tobcaan (Yuan-chao pi-shi).
Die geheime Geschichte der Mongolen, aus der
chinesischen Transkription (Ausgabe Ye Tsh-hui)
im mongolischen Wortlaut wiederhergestellt von
Erich Haenisch. Leipzig, 1937.

ヘニツシュ氏は已に一九三一年にザクセンのアカデミイ論文集中にて元朝祕史考を發表したが今回は祕史の全文を羅馬字譯して出版したのである。詳細が示す如く葉德輝の刊本により支那字を羅馬字化して蒙古文に還元したのである。漢字に慣れない歐米の諸學者はこれによつて古代蒙古文獻に接するを得たるを便とし喜ぶ事であらうと思はれる。然し蒙古文に還元したとは云へ、又極めて慎重なる態度を以て漢字の痕迹を多分に遺留せしめておいたとは云へ、そこに却て疑問を起さしめるが如き音譯もあるから、蒙古學者には矢張り原漢字本を必要とするであらう。例へば題名のモンゴルをワザとマンゴルとする如きである。余は茲には蒙文還元の方法に就いて詳論を試みようとはしないが、假令この古文獻を西洋學者の利用に便する急務があつたとし、完全なる還元には幾多の尙ほ研究すべき點があるから拙速の方法を取るにしても、今少し方法を考へるべきであつたと思ふ。これも隴を得て蜀を望むの類かも知れない。我國でも諸學者によつて蒙文還元の企ての有つた事は聞いてゐたが、敢然として第一

にこの完譯を出した撰者の努力精進は賀してよい。

本書は葉德輝本を底本としてゐるが、諸本を參考して校訂してゐる。原漢字本の校勘記を陳援庵が試みてゐると聞くが、これも此書が第一聲を發したのである。諸本の略説では物足りない事がある。例のウルガ本である。前著四十四頁では之を漢本からの還譯本としてゐたが、今著捌頁では見ないとしてゐる。このウルガ本の正體の何であるかは極めて注目を要すると思ふが余には未だ詳かでない。嘗てペリオ博士に質して、祕史を主材とせる一編年史なるを知つたが、(昭和十年十一月の泊園第十八號を參照)、ウルガ本を一度研究して見たいものである。上海涵芬樓本は四部叢刊三編史部中に收められたが、これこそ傳世祕史の祖本なる張古餘抄本顧廣圻校本盛昱藏本なのである。著者はさうとは氣付いたのでないかして餘り關心を持たないらしい。たゞ校異に資するのみである。今著一二六頁に於て涵芬樓本には二序を有し、其一は葉本の第一跋と同じと書いてゐる。葉本第一跋は其跋に撰者の名を載せてないが、顧廣圻のものなるは周知の事である。所で二序

はおかしい。若し二序あつたものなら、四部叢刊の出版者が其一を刪落せしめたのは遺憾である。假令學術に要あるものでないにしても、流轉の道が判明するのだ。ヘエニツシュ氏は又那珂本の未見を氣にしてゐる様だが、那珂本は京都でなく、東京文理大學に有る筈である。然し葉刻本の底本は文廷式抄本なる事は陳氏が明かに記してゐるし、文廷式本は盛昱藏本に出で、文廷式本から内藤本が出で、内藤本から那珂本が出てゐるのであるから、涵芬樓本を目睹し得た以上は最早問題はないではないか。氏は目錄學的研究が足りない様だ。又内庫舊藏の原刻殘本を使用してゐるが、是は便利である。四部叢刊本は原刻殘葉四十一紙を影印挿入したのであつたが、殘紙は四十五紙の筈であつた。今氏の記述によつて残り四紙は半葉の殘紙であることを知り、且つ氏の校勘記に見えてゐるので吾等は之を喜ぶ次第である。尙ほ葉刻本の序は前著では甚しい誤讀をしてゐたが、今著一〇三頁には全譯し訂正されたのは氏の名譽の爲にも當然だ。余は陳援庵の校異、伯希和の譯注の出づるを鶴首して待つてゐる者である(石濱純太郎)